

Title	<研究の周辺> 2006年夏の雑記録
Author(s)	櫛田, 民夫
Citation	資本と地域 (2006), 3: 52-53
Issue Date	2006-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/66149">http://hdl.handle.net/2433/66149</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## &lt;研究の周辺&gt;

## 2006年夏の雑記録

櫛田民夫

7月31日(月)

今日から某大手進学塾にて、中学3年生および小学5・6年生特進クラスの社会科担当アルバイト講師として夏季講習期間をスタートする。夏季講習は2度目の経験であるが、今年度は勤務校の社会科教科主任として活動することとなり、教科運営は全面委任となる。中学3年の特進クラスは、京都大学への進学実績で全国的に知られる公立高校への合格が目標設定されており、標準クラスは地区偏差値上位高校の合格が目標とされている。前任アルバイト講師N氏(立命館大学修士1回生)からの引継ぎ事項はなし。通常期間の筆者は英語科を担当しており、社会科は担当していない。しかし、社会科の教科指導方針などの実務説明は特になく、授業をスタートすることになった。

授業開始前の打ち合わせでは、ある大手進学塾での30代半ばの男性アルバイト講師による生徒への暴力行為を報じた本日付の新聞記事に目を通すよう指示される。記事では夏季講習中の課題をこなさなかった生徒に対して、アルバイト講師が暴行を加えたことが報じられていた。当然のように、同様の行為がないようにというのが本部指示の内容であった。なお、筆者の勤務する進学塾では、7月21日に事前研修がおこなわれたが、その際の本部責任者の訓示では、生徒の偏差値上昇度が教科担当者の業績であり、偏差値上昇度が不十分であれば適切なサービスがなされていないと判断することであった。これにより、教科担当者に対する業績評価基準が再度明示されたわけである。ちなみに、この事前研修に参加した半数以上の人々は、雇用継続性に不安を抱えるアルバイト講師であり、その多くが30代男性フリーターであった。

なお、先日、勤務校の責任者であった中年正社員K氏が長期休職扱いとなり、今週からの集合授業担当者は全てアルバイト講師となっている。勤務2年目の筆者の時給は2100円あるが、これは授業開始前の打ち合わせや授業終了後の生徒への対応時間を含んだ拘束時間に対しての時間給ではなく、報酬は正味の授業時間に対してのみ支払われる。したがって、拘束時間に対する支払額になおすと、筆者はより低い時間給を受け取ることとなっている。

8月1日(火)

昨日と同じく、正午に出勤し13時から授業を開始する。18時に授業が終了。18時10分から18時40

分まで再テストの運営を行う。再テスト不合格者には罰則課題を課し、それ以外のものには自習をさせる。再テスト運営が終了した後は、テスト結果リストの作成と掲示などの事務作業を行う。所要時間は約1時間である。授業終了後の再テスト運営を含む諸業務(所要時間1~1.5時間)への手当では500円であることが伝えられる。19時半ごろ退勤。

8月2日(水)

社会科の授業は今日で3日目である。昨年度の筆者の勤務校で社会科教科主任を務めていたアルバイト講師(京大法学部4回生)のB氏から頂いた講義ノートを参照して作成したノートをもとに授業を行う。中学受験を前提とした小学5・6年生特進クラス向けの授業内容と、京大進学実績を誇る公立高校を受験する中学3年生向けの授業内容は、基本的にはほぼ同じである。B氏によれば、小学生の特進クラスでは、社会科の日本関連単元については大学入試センター試験の問題が解けるレベルに到達させることが理想だそうである。この特進クラスに通う子供たちは、ほぼ社会的地位が高く高所得を得ている人々(医者、会社社長)か、あるいは大きな屋敷を持つ農家を親に持っているらしい。さらに補足すれば、筆者の勤務校では小学生の特進クラスは完全な赤字であり、集客率の高い中学3年生クラスで生じる黒字分からの補填が行われている。なお、中学3年生クラスには小学生特進クラスより所得階層が低いと思われる家庭の子供が多数在籍している。

ともあれ、授業を受けさせるためにあれこれと工夫が必要なのは、特進クラスであれ何であれ同様である。彼らは顧客であり、アミューズメント性を含めた顧客満足度を最大化させて偏差値を上昇させることが対人サービスなのだと、事前研修で再三にわたり指摘されたことが頭をよぎる。「教育であるよりも対人サービス」なのであり、顧客を喜ばせるために「顧客水準に自分の水準を合わせる」のが筆者の重要な仕事だというのが、本部責任者からのコメントであった。

しかし会社の「対人サービス論」については承ったが、実際のサービス内容を決める人的・物的要素への会社のインプットが乏しすぎはしないだろうか?

8月11日(金)

先週からの週5日、計10日間続いた夏季講習は、来週からの盆休みで中断となる。本来なすべき研究活動のための時間を、明日からの9日間はまだまってることができる。2週間続いたパートタイム研究者からフルタイム研究者へのリズム転換にあたって空費される時間は惜しく悔しいが、とにかく本来なすべき仕事に戻

れることが素直にうれしい。

8 月 12 日 (土)

早朝に墓参りを済ませ、その足で研究室へ向かう。18 時まで研究活動を行い、その後は研究室メンバーと飲み会に行く。アルバイト生活に追われる筆者の慰労会も兼ねてセッティングしてくれた後輩院生の心遣いに感謝し会に出席する。当夜は、大学院生も社会人も男女も問わず、出席者の多くが将来に対して漠然とながらも浅からぬ不安を抱いていることを暗に確認して散会した。

8 月 20 日 (日)

明日から夏季講習の最終週が始まる。今朝の朝刊にはアジア留学生を対象とした無償奨学金制度が経済産業・文部科学両省により開始されるとの記事がでている。筆者は授業料免除などを受けることなく京都

大学大学院に 7 年間に渡って毎年授業料を支払い、現在も半期約 27 万円もの授業料の支払いのために、総額 13 万円前後の収入が得られる見込みの夏季講習アルバイトに多くの時間をとられている。

「手弁当」と「自学自習」を院生指導のモットーとする教授連は、現在の大学院生がどういった社会的状況の中で、いわゆる授業料の支払いのためにいかにして稼ぎそれを支払ってきたのか、そして現在も支払い続けているのか、本当に理解しているのだろうか？彼らも社会学者であるならば、彼ら自身の利益と組織の存続のみにとられるばかりではなく、日本の大学院教育のありかたについて、その現状をわれわれ院生とオープンに議論できる度量をもっていただきたい。

(京都大学大学院経済学研究科)

## 研究活動報告 II

### 地域経済研究会

2005 年 12 月 10 日 (土)

○相楽美穂氏 (立命館大学)

「天然資源管理における予防原則の適用」

○岡田知弘氏 (京都大学)

「日本経済史の地域論的再構築のためにー地域形成史の射程ー」

2006 年 2 月 12 日 (日)

○倪卉氏 (京都大学大学院)

「中国蚕糸業の展開と現状ー浙江省と江蘇省の事例を中心にー」

○郭思宜氏 (京都大学大学院)

「台湾における原子力政策の展開と現局面」

○槌田 洋氏 (日本福祉大学)

「中山間地域集落の維持可能性～長野県阿智村の事例から」

2006 年 4 月 22 日 (土)

○渡邊英俊氏 (京都大学大学院)

「第 1 次大戦前におけるアルゼンチン貿易の変化と構造」

○池田 清氏 (下関市立大学)

「日本における災害の法と組織、行財政の問題と課題」

2006 年 6 月 17 日 (土)

○書評：大貝健二氏 (京都大学大学院)、林 昌宏氏 (京都大学研究生)

コメント：阿知羅隆雄氏 (滋賀大学)、鎌倉 健氏 (大阪樟蔭女子大学)

岡田知弘編著『京都経済の探究』高菅出版、2006 年 2006 年 9 月 9 日 (土)

○大貝健二氏 (京都大学大学院)

「戦後における金属加工産地の構造変化と燕産地の適応力 - 産地内分業における研磨工程を中心に -」

○倪卉氏 (京都大学大学院)

「現代中国における蚕糸業の展開 - 浙江省と江蘇省の事例を中心に -」

○瀬尾泰大氏 (奈良県総務部財政課)

「今後の極小規模自治体の行政運営について」

○飛鷹茂忠氏 (滋賀大学大学院)

「森林・林業の担い手問題 - 聞き取り事例を中心として -」